

結城豊太郎翁の姿に学ぶ
～冷静に現実分析、国のために尽力～

黒江哲郎

北の丸公園の緑を背に皇居を望んでたたずむ国立公文書館は、歴史資料として重要な政府の文書類を保存・管理し、広く国民に閲覧の機会を提供している機関です。昨年来、南陽市出身の偉人・結城豊太郎翁について調べるため、私は同館に何度か足を運ぶことになりました。

結城翁は、旧制山形中学(現・山形東高)から第二高等学校、東京帝国大学を経て、日本銀行に入行。昭和12年に大蔵大臣を務めた後、日銀総裁として終戦前年まで戦時金融の舵取りを担った昭和史上の重要人物であり、郷里のために私財を投じて塾や水道を整備したことでも知られています。

たまたま私は同じ南陽市出身で山形東高の後輩に当たるというご縁もあり、結城豊太郎記念館友の会から講演の依頼を頂きました。これを機に、彼がどんな思考の下に行動してきたのかを理解したいと思い、国立公文書館の協力を得ていくつかの資料を閲覧させていただきました。その一つが、極東軍事裁判の宣誓供述書です。これは、結城翁が大蔵大臣に就任した際に、賀屋興宣氏を大蔵次官に起用した経緯について述べたものです。賀屋氏は、日米開戦時の大蔵大臣として戦時予算を編成した責任などを問われA級戦犯として終身刑となりましたが、のちに減刑され衆議院議員・法務大臣を歴任しました。

その宣誓供述書で、結城翁は、大臣就任の際の重要な目標の一つが前の内閣が立てた軍事予算の急拡大とそのための増税という方針を修正することだったと述べています。そのために、かねて軍事費の急増阻止に努力していた賀屋氏を抜擢して次官に据えたというのです。この結果、少額ながらも軍事予算の縮減に成功し、国際収支の悪化やインフレ増進などの経済界の懸念が緩和されたのでした。

不用意にめくると破れてしまいそうな古い紙の資料を慎重に読みながら、結城翁の胆力に強い印象を受けました。彼が大蔵大臣に起用されたのは、日銀の大先輩である高橋是清蔵相らが暗殺されたあの二・二六事件から1年足らずの昭和12年2月です。度重なる軍人のテロにより政界も財界も萎縮していた時期に同じ大蔵大臣を引き受け、しかも軍部に抗して軍事予算の縮減を図ったわけです。

結城翁が南陽市赤湯に生を受けたのは明治10年で、中学時代には日清戦争を、日銀入行の年には日露戦争をそれぞれ経験しています。世界は帝国主義のまっただ中にあり、わが国も列強に対抗して富国強兵、殖産興業に邁進していた頃です。彼が、こうした時代の雰囲気の中に身を置きながら軍事偏重に流されなかったのはなぜでしょうか。私は、生来の豪胆な性格とともに、その透徹したリアリズムによるものと推察しま

す。

日銀入行以来、欧米や満州、中国などを訪れ、外国の事情を直接見聞していた結城翁は「国土が狭小で資源が乏しく経済規模が小さい」というわが国の構造的問題も正確に認識していました。折々の講演では、小さな経済規模の割に人口が急増する日本が列強に抗して繁栄するためには、満州や中国と共栄圏を構成するしかないが、その進出は強引であってはならず、特に中国とは共存共栄を目指して提携すべしと主張するなど、同調圧力に屈しない冷静な分析力がうかがわれるのです。

彼の考え方には、現代に生きる我々にも学ぶべき点が数多く見つかります。例えば、「農工商の調和」と題する昭和4年の講演で、商工立国の考え方は世界的分業状態をめざすものだが、その前提である世界の恒久的平和状態は容易に実現し得ず非現実的である旨を指摘しています。グローバル経済を支える国家間の物資供給網が中国の経済的威圧やウクライナ戦争などの地政学リスクに脅かされている現状を見れば、彼の分析が正しかったことは明らかでしょう。

また、軍事力についても、「お互いに戦争をせずに平和を維持しようとする軍備の充実」が大事であり「経済力に見合った国防の充実」を主張していますが、これこそまさに現在の「抑止力」の考え方そのものです。

6月に行われた結城豊太郎記念館友の会主催の研究会でもこれらのこととお話ししました。畑違いの安全保障政策に携わってきた私ですが、すぐれた経済人として冷徹に現実を見つめ国に尽くした結城翁の姿勢に今後も学び続けたいと考えています。

(山形新聞 2024年7月11日付「直言」欄掲載分を一部訂正の上転載)